令和４年度　千葉市教育研究会社会科部会

小学校稲毛・若葉区ブロック　６月例会

社会科学習指導案

千葉市教育研究会社会科研究主題

新たな社会の担い手として生きる力を育む社会科学習

～児童生徒が社会的な見方・考え方を働かせる問題解決的な学習を通して～

日時	単元名
令和４年６月２１日	縄文のむらから古墳のくにへ

〈検討のポイント〉

〇加曽利貝塚の他に、三内丸山遺跡、尖石遺跡を取り上げ、くらしの様子について共通点を見出させる学習が、縄文時代の確かな理解につながったか。

社会科学習指導案

１　小単元名　縄文のむらから古墳のくにへ

２　小単元について

本小単元は、学習指導要領第６学年の内容（２）のア（ア）「狩猟・採集や農耕の生活、古墳、大和朝廷（大和政権）による統一の様子を手掛かりに、むらからくにへと変化したことを理解すること」を受けて扱うものである。

本小単元では、狩猟・採集の生活から米づくり中心の生活へと変化したことから、権力をもつ者が生まれ、大きな力をもつ豪族を中心とした大和朝廷によって地方の統一が進められたことについて調べることを通して、むらからくにへと変化したことがわかるようにすることをねらいとしている。

本小単元では、縄文時代の人々の生活を理解させるために、加曽利貝塚を学習の土台とする。加曽利貝塚は、歴史的価値が広く認められることから国の特別史跡にも指定されている遺跡である。本学級の児童は５年生の総合的な学習の時間において、加曽利貝塚について調べ学習をしている。現地に行ったり学芸員から話を聞いたりして調べるテーマを決め、グループで発表し合う活動を行った経験から、縄文時代の人々の生活についてある程度の知識を既にもっている。しかし、例えば食事のことは詳しいが、土器のことはあまりわかっていないなど、もっている知識に偏りがあったり、時間が経過していてあまり覚えていなかったりしている児童もいることがわかった。

このような実態を踏まえ、縄文時代のくらしについて学習したことを生かして、本小単元ではより確かな理解へとつなげていきたい。そこで、まず１時間目では加曽利貝塚について５年生で学習したことを振り返る時間を設け、２時間目では加曽利貝塚のくらしについてまとめたときの視点を使って、青森県の三内丸山遺跡、長野県の尖石遺跡の人々のくらしについて調べる。そして３つの遺跡を比較し、縄文時代のくらしについてまとめていくようにする。そうすることで、より広い視野で縄文時代のくらしを捉えることができ、狩猟・採集中心の生活をしていたという理解を深めることができると考えた。三内丸山遺跡と尖石遺跡を取り上げたのは、加曽利貝塚と同年代の遺跡で地理的に加曽利貝塚から離れた場所にあり、寒冷であったり、山に囲まれていたりと周囲の環境も加曽利貝塚とは異なる遺跡だからである。それにも関わらず、調べてみるといずれも同じようなくらしをしていることがわかり、児童は「離れていたり環境が違っていたりしても縄文時代のくらしはどこも同じなのだ」と理解することができるのではないかと考えた。縄文時代のくらしについて調べた衣・食・住・道具の視点は、弥生時代のくらしを調べる際も同じように活用していく。そうすることで２つの時代を比較しやすくなり、違いも捉えやすくなる。人々のくらしの変化を理解させた上で、その後くらしや世の中がどのように変わっていたのか疑問をもたせ、問題解決的な学習につなげていけるようにする。

歴史学習の最初の単元となるため、これから学習をしていく上で、児童が歴史に興味・関心をもったり、新しいことを知る楽しさを感じたりすることができるようにしていきたい。

３　児童の実態（６年　男子１４名　女子１６名　計３０名）

【社会科の学習について】

〇社会科の学習は好きですか。

好き	どちらかといえば好き	あまり好きではない	好きではない
９名	１０名	１１名	０名
（理由） ・昔やこれからのことを知ることができる。 ・日本の社会を知ることができる。 ・歴史が好き。 ・将来につながる。 ・生活とどんなかかわりがあるのかを考えるのが楽しい。　など		（理由） ・難しい言葉が多い。 ・覚えたり、調べたりするのが好きではない。 ・算数や理科のほうが楽しい。 ・かかわりがあるかを考えるのが難しい。 など	

【縄文時代のくらしについて】

〇５年生の総合的な学習の時間で加曽利貝塚について調べて、わかったことはどのようなことですか。

（自由記述）

・何を食べていたか。（生き物を狩っていた。貝を獲っていた。どんぐりを食べていた。） ・弓や落とし穴をつくって狩りをしていた。　・土器を作っていた。　・竪穴住居に住んでいた。 ・約 4000 年前に人が住んでいた。　・アクセサリーなどがあり、おしゃれもしていた。 ・千葉県は貝塚が多いこと。　・何を食べていたのか。　・どんなくらしをしていたのか。

〈考察〉

本学級は、社会科の学習が好きな児童が多いことがわかった。一方で、あまり好きではないという回答をした児童も３分の１ほどいた。理由を見ると、習得するべき用語に馴染みがなく難しく感じていたり、覚えなければいけないと考えていたりすることがわかった。学ぶ楽しさを感じながら学習していくには、「つかむ」の過程で、児童が題材に興味をもち、追究意欲をもつことが大切であると考える。本小単元では、縄文時代と弥生時代のくらしの様子の違いから学習問題を考えていく。違いを捉えるには、それぞれの時代の理解が大切である。そこで、５年生の加曽利貝塚の学習で得た知識や視点を活用して他の遺跡と比較し、共通点を見つけることで、縄文時代の確かな理解につなげていく。また、縄文時代と同じ視点で弥生時代を調べることで、二つの時代の違いが捉えやすくなり、「どう変わっていったのだろう」「調べていきたい」という思いをもたせることができるのではないかと考えた。また、用語を理解させるために、ただ言葉の意味を知るのではなく、デジタル教科書やギガタブなどのＩＣＴ機器を活用し、例えば道具なら使われていた様子がわかるように視覚的に表示するなど、具体的にイメージがもてるように単元を通して指導をしていきたい。

５年生の時に学習したことについて、具体的に覚えている児童とそうでない児童がいることがわかった。覚えていても衣・食・住・道具の視点のうち、複数の視点で回答している児童は少なかった。つまり、多面的な理解が十分でないといえる。そこで単元の初めに、５年生で学んだ加曽利貝塚での人々のくらしについて全体で確認し、理解を確かなものにしていく。その際、衣・食・住・道具の視点で整理し、次時以降の比較をする時に生かせるようにする。

４　知識の構造図

まとめる

中心概念（概念的知識）

狩猟・採集の生活から、農耕の生活となり、生活や社会の様子は変化した。むらは次第にくにへと発展し、各地に大きな力をもつ豪族が出現し、やがて大和朝廷（大和政権）により国土が統一されていった。　⑧

社会的事象（具体的知識）

- 縄文のむらの人々は、狩猟や採集の生活を営み、必要な道具は、石、木、骨などでつくっていた。　①②
- 弥生のむらの人々は、定住して農耕の生活を営み、指導者を中心に共同で米づくりを行っていた。　③
- 縄文のむらは狩りや採集を中心とした生活であり、弥生のむらは、農耕を中心とした生活を行っていた。　④
- 米づくりが広がると、力の強いむらが周辺のむらを従え、次第にくにへと発展した。くにを支配する王や豪族は、大陸の技術や文化を取り入れ、くにづくりに役立てた。　⑤
- 三～七世紀には、すぐれた技術者を指図し、多くの人々を働かせて築く、巨大な古墳が各地に現れた。　⑥
- 大和地方に、より大きな力をもつ大和朝廷（大和政権）が現れ、五～六世紀ごろには、九州地方から東北地方南部までの豪族や王を従え、大陸からの文化を積極的に取り入れた。　⑦

用語・語句

- ・加曽利貝塚・たて穴住居・狩り・採集・縄文時代・三内丸山遺跡・縄文土器・尖石遺跡
- ・板付遺跡・米づくり・石包丁・弥生土器・弥生時代
- ・くに・豪族・王・邪馬台国・青銅器・鉄器
- ・古墳・石室・仁徳天皇陵古墳（大仙古墳）・前方後円墳・はにわ
- ・大王・神話・渡来人・大和朝廷（大和政権）・古事記・日本書紀

問題解決的な学習の過程

つかむ → 調べる

５　小単元の目標

我が国の歴史上の主な事象について、世の中の様子、代表的な文化遺産などに着目して、遺跡や地図、年表などの資料で調べ、世の中の変化の様子を考え、表現することを通して、狩猟・採集や農耕の生活、古墳、大和朝廷（大和政権）による統一の様子を手掛かりに、むらからくにへと変化したことを理解できるようにするとともに、主体的に学習問題を解決しようとする態度を養う。

６　小単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①世の中の様子、代表的な文化遺産などについて、遺跡や地図、年表などの資料で調べ、狩猟・採集や農耕の生活、古墳、大和朝廷（大和政権）による統一の様子を理解している。	①世の中の様子、代表的な文化遺産などに着目して、問いを見いだし、狩猟・採集や農耕の生活、古墳、大和朝廷（大和政権）について考え、表現している。	①狩猟・採集や農耕の生活、古墳、大和朝廷（大和政権）による統一の様子について、予想や学習計画を立てたり、学習をふり返ったりして、学習問題を追究し、解決しようとしている。
②調べたことを年表や文などにまとめ、むらからくにへと変化したことを理解している。	②狩猟・採集や農耕の生活、古墳、大和朝廷（大和政権）による統一の様子を関連付けたり総合したりして、世の中の変化の様子を考え、適切に表現している。	

７　小単元の指導計画（８時間扱い）

過程	時間	主な学習活動と内容
つかむ	1	○加曽利貝塚の学習を振り返り、縄文時代の生活をまとめる。 （衣）動物の皮や植物の繊維を糸や布にして、着るものをつくっていた。 （食）狩りや漁、採集中心の生活で、動物や貝、木の実などを食べていた。 （住）竪穴住居に住んでいた。 （道具）生活や狩りに必要な道具を、石や木、骨などでつくっていた。 縄文土器を使って、煮たり蓄えたりしていた。
	2（本時）	○加曽利貝塚と三内丸山遺跡、尖石遺跡を比較することで、共通点を見出し、縄文時代の生活の様子を理解する。 ・動物の皮や植物でつくった服を着ていた。 ・狩りや漁をしたり、木の実を採ったりして食べていた。 ・竪穴住居に住んでいた。 ・土器をつくって、料理や保存のために使っていた。 ・加曽利貝塚以外でも、狩猟や採集を中心とした生活をしていた。

	3	○板付遺跡や出土品の写真、米づくりの様子の想像図を見て、米づくりが始まり、人々のくらしの様子がどのように変化したのか、気付いたことを話し合う。 （衣）布でつくった貫頭衣を着ていた。 （食）米を食べるようになった。弥生土器を使って調理をしたり、蓄えたりしていた。 （住）竪穴住居に住んでいた。高床式倉庫に米をたくわえていた。 （道具）米づくりのための道具を石や木などでつくっていた。
	4	○縄文時代と弥生時代の様子を比べて話し合う。 ・縄文のむらでは、狩りや漁をしたり、木の実を採ったりしていたが、弥生のむらでは米づくりをし、とれた米を保存していたようだ。 ・弥生のむらでは、周りに堀や柵がつくられている。兵士のような人もいる。 ○疑問に思ったことを発表し合い、学習問題をつくる。 ・食料を安定して手に入れられるようになって、人口が増え、田も広がったのではないか。 ・弥生のむらにあった堀や柵は何のためにつくられたのだろう。 米づくりが始まったことで、人々のくらしや世の中は、どのように変わっていったのだろう。
調べる	5	○米づくりの広がりによって、むらの様子がどのように変わっていったのかを調べる。 ・米づくりの広がりにより、むらとむらの間で争いが起こった。 ・むらの指導者は、むらを支配する豪族となり、豪族の中には、まわりのむらを従えてくにをつくり、王と呼ばれる人も現れた。 ・各地の王や豪族は、大陸の進んだ技術や文化をくにづくりに役立てた。
	6	○資料などから古墳づくりの目的、王や豪族たちの力の大きさについて考え、話し合う。 ・古墳の大きさ、多くの人を動員してつくられたこと、出土品などから、古墳にほうむられた人物が大きな力をもっていたといえる。 ・王や豪族たちは、自分の力の大きさを示すために古墳をつくらせた。
	7	○大和朝廷の力が各地に広がり、国土がどのように統一されていったのかを調べる。 ・ワカタケル大王の名が記された鉄刀と鉄剣が出土された場所から、大和朝廷の力の広がりがわかる。 ・神話が作られるほど、大和朝廷は大きく強い「国」になった。 ・渡来人の中には建築や土木工事、焼き物などの技術を身につけた人々がおり、進んだ技術を大陸からもたらした。
まとめる	8	○学習問題について調べてきたことを、ノートに整理し、まとめる。 ・米づくりの広がりによって、むらがくにへと発展していた。 ・大和朝廷が勢力を広げ、国としての日本の形が出来上がっていった。 米づくりが始まったことで、人々の生活は安定し、強いむらが周辺のむらを従え、次第にくにへと発展していった。やがて各地に大きな力をもつ豪族が出現し、大和朝廷により国土が統一されていった。

８　市教研社会科研究主題解明のための方策

新たな社会の担い手として生きる力を育む社会科学習
～児童生徒が社会的な見方・考え方を働かせる問題解決的な学習を通して～

＜本年度主題解明のための方策＞

研究内容１　問題解決的な学習につながる教材・単元構成の工夫
研究内容２　問題解決的な学習につながる指導法の工夫
研究内容３　指導と評価の一体化

本小単元では、研究主題の中から次の点に留意して指導及び評価に取り組んでいきたい。

研究内容１　問題解決的な学習につながる教材・単元構成の工夫

〇縄文時代について、確かな理解をするための単元構成の工夫

本小単元では、加曽利貝塚とともに、他の遺跡を取り上げ、縄文時代のくらしについて、より確かな理解をさせていく。5年生で加曽利貝塚について学習し、縄文時代についての知識をある程度もっていることから、それを生かした２時間の設定とした。１時間目は加曽利貝塚について衣・食・住・道具の視点でまとめる。２時間目で青森県三内丸山遺跡と長野県尖石遺跡を同じ視点で調べ、共通点を見つける。こうした活動を通して、「縄文時代の人々は場所が違っても、狩りや採集中心の生活をしていたのだ」という理解につなげることができるだろう。複数の遺跡の共通点から結論付けることで、縄文時代のくらしのたしかな理解につながると考えた。

〇三内丸山遺跡、尖石遺跡の教材化

より確かな縄文時代のくらしの理解のために、加曽利貝塚以外に三内丸山遺跡と尖石遺跡を教材として取り上げる。この２つの遺跡を選んだ理由は、①加曽利貝塚と同年代の遺跡である、②千葉から遠く離れた遺跡である、③気候や地形が千葉とは異なるということが挙げられる。海に近い加曽利貝塚、寒冷な気候の三内丸山遺跡、山に囲まれている尖石遺跡といった３つの遺跡には地理的な違いがあり、かつ互いに遠く離れているにも関わらず、くらしの様子は変わらないということがわかれば、当時は日本中で同じような生活をしていたという縄文時代の理解が確かなものになるだろうと考えた。

研究内容２　問題解決的な学習につながる指導法の工夫

〇社会的な見方・考え方を働かせる指導法の工夫

本小単元の１時間目で加曽利貝塚でのくらしについてまとめる際は、衣・食・住・道具の視点で整理していく。衣・食・住の視点で見ていくことで、くらし全般についての理解ができると考えた。また、３つの視点以外に道具の視点も欠かすことができないと考えた。それは縄文土器をつくっていたこと以外にも、狩りのために石や動物の骨などで道具をつくっていたことはこの時代の特色ともいえるからである。そして、この４つの視点で三内丸山遺跡や尖石遺跡も見ていくことで、比較がしやすくなり、共通点も見つけやすくなる。それによって、この時代の確かな理解につなげていきたい。また、弥生時代のくらしの様子を捉える際も、同じ視点で見ることで、２つの時代の違いにも気付きやすくなるだろう。本小単元の学習を通して、くらしの様子を捉える際は、４つの視点で調べればよいという考えを児童にもたせることができるだろう。そうすることで、この学習においても、その時代のくらしの様子を捉える際に生かしていけるようにしたい。

９　本時の指導（２／８）

（１）本時の目標

加曽利貝塚と三内丸山遺跡、尖石遺跡との共通点を見出し、縄文時代の人々は狩猟や採集の生活を営んでいたということを理解することができる。（知・技）

（２）本時の展開

時配	学習活動と内容	○教師の指導と支援　◆評価	資料
5	1　前時で学習したことを振り返り、本時の課題をもつ。 ・加曽利貝塚に住んでいた人たちは、狩りや採集中心の生活をしていた。 ・尖石遺跡でも木の実を食べていたのかな。 ・詳しく調べてみないとわからないな。	○前時の学習を振り返るとともに、加曽利貝塚以外にも特別史跡があることを知らせ、青森県三内丸山遺跡、長野県尖石遺跡の場所を地図に示す。 ○２つの遺跡では何を食べていたか、どのような家に住んでいたかなどと投げかけて、調べてみないとわからないという思いをもたせ、児童の発言から学習問題をつくる。	・日本地図
	縄文時代、加曽利貝塚以外の場所では、どのようなくらしをしていたのだろうか。		
5	2　学習問題に対する予想をし、どのような視点で調べればよいかを確認する。 ・家は、竪穴住居以外にもあるかもしれないな。 ・生活の仕方は同じだけれど、食べ物は場所によって違うかもしれない。 ・加曽利貝塚と同じ、衣・食・住・道具の視点で調べればよさそうだ。	○加曽利貝塚についてまとめたことを振り返り、「くらしの様子は何を調べたらわかるのか」と問いかけ、衣・食・住・道具の４つの視点で調べればよいことを確認する。	・加曽利貝塚の生活の様子をまとめた掲示物
１２	3　三内丸山遺跡や尖石遺跡のくらしの様子を４つの視点で調べる。 ・糸で編んでつくった布が使われていた。 ・狩りをしてシカやイノシシを食べていた。川で魚を獲っていた。 ・土器を作っていた。 ・石や動物の骨で、狩りのための道具を作っていた。 ・竪穴住居に住んでいた。	○４人班を２人ずつに分け、それぞれの遺跡のくらしの様子を調べ、情報共有することを伝え、学習の見通しをもたせる。 ○３つの遺跡共通点を見つけやすくするため、加曽利貝塚で調べた時と同じ書式のワークシートを使う。	・ワークシート ・各遺跡のパンフレット等を元に自作した資料

１３	4　調べたことをグループ内で情報共有し、ワークシートに整理する。 ・尖石遺跡の食については、シカやイノシシを狩り、川の魚などを獲っていたそうだよ。 ・三内丸山遺跡の住については、竪穴住居に住んでいたようだ。 ・三内丸山遺跡の道具については、土器が見つかっていて煮炊きに使われていたらしいよ。	○各班を回り、衣・食・住・道具の観点で調べたことを児童に短冊に記入させ、黒板に貼っていく。 ○黒板に貼った短冊の内容を学級全体でも確認し、班ごとに調べた内容がだいたい同じであることを確認する。	・短冊 ・ワークシートを拡大したもの
１０	5　加曽利貝塚と他２つの遺跡を比較し、縄文時代のくらしについて個人でまとめる。 ・ドングリやクリなど食べるものは違うけれど、木の実を採って食べていたのは同じだ。 ・狩りをして動物を食べていたのも共通している。 ・どこも竪穴住居に住んでいた。 ・土器を作っていたのも同じだ。 ・加曽利貝塚と同じような生活をしていることがわかる。	○児童の学習の理解度を把握するため、まとめの板書を「加曽利貝塚以外でも、」にとどめ、続きは児童自身が書くようにする。 ○児童数名にまとめに書いたことを発表させ、内容が同じであることを確認した上で、学級全体のまとめを板書する。 ◆加曽利貝塚と三内丸山遺跡、尖石遺跡との共通点を見出し、縄文時代の人々は狩猟や採集の生活を営んでいたことを理解している。（発言・ノート）〈知・技〉	
	加曽利貝塚以外でも、縄文時代の人々は、たて穴住居に住み、狩りや採集をしてくらしていた。		